

学校だより

学校だより7月号
令和4年6月30日
発行者 外日角小学校
TEL 283-0040

ほめることより「認めること」

校長 稲垣 一郎

1年生の朝顔が大きく育ち、2年生のミニトマトも緑の実をいっぱいつけています。太陽と雨の恵みを受けて、ぐんぐん成長しています。プール開きも終わり、毎日プールから歓声が聞こえています。4月に比べ、子どもたちは、どの子も様々な体験（宿泊体験学習、器械運動交歓会、音楽会、話し方大会、なかよし活動など）や学習を通し、一回り大きくたくましくなりました。これも多くの保護者の皆様のご支援・ご協力のお陰だと思っております。1学期も残すところあと15日です。1日1日を大切に、1学期の締めくくりをしっかりとしたいと思います。

先日、ある本のことを思い出しました。『ほめない子育てで子どもは伸びる』（小学館）という本です。この本の著者、岸英光氏は、コミュニケーションスキルの専門家です。これまで「ほめて育てるのがいい」という言葉をよく耳にし、ほめることが大事だと思っていた私にとって、衝撃的なタイトルでした。なぜほめてはいけないのか。それは、子どもは、親や先生にほめてほしい、「いい子」と言ってほしい、というように、子どもたちは必死に「いい子」を演じ、大人の顔色をうかがうようになってしまう。そして、自分らしさを失ってしまいます。自分がしたいことを強くもてなければ、「何を応えればよい」と考え、言われることを守っていけばよいだろう。もしも、そんなふうにならば必死で演技をしないといけないとしたら疲れるだけです。大人でも、人に合わせて「良い人」、「仕事ができる人」を演じ続けなければならないとしたら嫌になりますよね。子どもなら、なおさらかもしれません。

ではどうすればよいのでしょうか。ほめることに代わって『認める』ことです。つまり、言葉だけで「えらい」「すごい」「上手」というほめ言葉ではなく、子どもがした事実をとりあげて、ほめ手が「どう思ったか」ということを伝えることが『認める』ということになるのです。具体的には「〇〇してくれてうれしかったよ」「〇〇してくれて助かったよ」といった具合です。「あなたはお手伝いできてえらいわね」という声かけと「あなたがお手伝いをしてくれて、本当に助かった。ありがとう。」の違いです。たしかに「ほめる」と『認める』とは似ているようですが異なります。つまりは、「ほめるだけではない」、「もう一言加える」ということでしょうか。『認める』子育てのメリットは、創造力や段取力がつく。ストレスに耐える「心の筋肉」がつく。キレたりしない、人間らしい「喜び」「哀しみ」を感じられるようになる。・・・など今、大切にしたい心が育まれます。今は不自由な生活でストレスがある中、ご家庭でお子さんと話す機会が増えているのではないのでしょうか。たくさん「認める言葉」をかけていただきたいと思っております。未来を創る子どもたちには、学校でもたくさん「認める言葉」をかけていきます。

「うちの子はこういうタイプ」と決めつけず、「いい」「悪い」の観点で見たりもせず、ありのままの「現在」のわが子を受け入れましょう。また、子どもの話を聴く時は、質問攻めにせず聴きます。途中でさえぎったり、評価したり、自分勝手に解釈することなく、最後まで聴き取ることが大切です。

認めて育てると、自分から何かをやりたいと思ひ始め、作戦を考え、実行して、失敗してもやり直すということができるようになるそうです。

